

5年間のプロジェクトを振り返って

心理科学研究センター研究推進責任者
人間科学部心理学科教授

澤 幸祐

5年間に及ぶプロジェクト「融合的心理学の創成：心の連続性を探る」も、その最後が近づいてきた。プロジェクトにおいて具体的に何が行われてきたのかについては、センター研究代表の長田教授による総括に譲り、ここでは別の観点から5年間の振り返ってみたい。

本プロジェクトにおける重要なタームは、「融合」というものである。学問が進歩のなかで歩んでいく道筋は、多くの場合において専門分化と峭壺化へとつながっていく。これは心理学についても同様であり、基礎心理学と応用心理学、特に臨床心理学との乖離については様々な場面で話題となっている。また、私の研究分野である動物心理学については、“A crisis in comparative psychology: where have all the undergraduates gone?”と題する意見論文が先日出版され (Abramson, 2015)、動物心理学や比較心理学とヒトを対象とした心理学の乖離が問題として取り上げられていた。プロジェクト開始の時点においてもその傾向ははっきりしており、私個人はある種の危機感を持っていた。本学の心理学科では、専門の異なる15名の教員が在籍しており、心理学の様々な領域を幅広くカバーした教育を行ってきたが、教員間での共同研究や領域をまたいだ融合的な研究が活発に行われてきたかという点、なかなか難しいものがあったと思う。

そんな中、融合のためのツールとして掲げたのが「ベイズ統計学」であった。伝統的な頻度論的統計手法と帰無仮説検定のもつ問題点やわかりにくいロジックについては、研究場面でも教育場面でも様々なかたちで話題になりはじめていた。ただ、振り返ってみると、心理統計学に関心を持つ一部のアーリーアダプターが関心を寄せてはいたものの、一般的な心理統計学ユーザーの間では、そこまでの広がりには5年前にはなかったように思える。この5年間で、大きく状況は変わった。本プロジェクト最終年度である2015年に開催された日本心理学会では、タイトルにベイズ統計学を含むシンポジウムが複数開かれ、多くの関心を集めていた。自画自賛で恐縮だが、我々のプロジェクトにはある程度の先見の明があったのではなかろうか。

ベイズ統計学の魅力として、あらかじめ研究者が持っている知識を分析に組み込んでいける点

や、自由なモデリングとパラメータ推定が可能である点が挙げられる。これらの特色は、基礎分野であろうが応用分野であろうが、またヒトを対象としていようが動物を対象としていようが、等しくその恩恵に浴することができる。異なる研究分野であっても、共通するモデルを立てて同じ土俵で議論することもできる。まさに融合的心理科学を実現するための接着剤として機能する可能性を秘めた手法であった。こうした可能性を最大限活用し、プロジェクト全体を加速するために、複数の教員と大学院生が合同でベイジアンモデリングの洋書を使って輪読会を行ったこともあった (Lee & Wagenmakers, 2014)。結果、教員のみならず大学院生やポスト・ドクターも、ベイズ統計学の手法についてある程度の知識と技術を獲得した。これらの成果は、プロジェクトの成果として学会発表や投稿論文として結実するだけでなく、彼らの学位論文などにも生かされており、若手研究者の育成という点からも有益な5年間であったと考えられる。

なにかの学問領域を新たに作り出すために、5年間という期間は長いようで短い。本プロジェクトも、一定の成果を挙げたものの、あくまでも種を蒔いたに過ぎない。教員同士の分野を跨いだ協働も、端緒についたばかりである。今後はこの流れをさらに加速し、5年間に蒔いた種を若手育成という意味でも研究成果の結実という意味でも、さらに推し進めていかなければならない。ベイズ統計学は、今後も心理学における様々な場面で広がっていくだろう。本プロジェクトの成果が、そうした心理学全体の流れのなかで何かの役割を果たしていければ、これに勝る喜びはない。

引用文献

- Abramson, C. I. (2015). A crisis in comparative psychology: where have all the undergraduates gone? *Frontiers in psychology, 6*.
- Lee, M. D. & Wagenmakers, E. J. (2014). Bayesian cognitive modeling: A practical course. *Cambridge University Press*.